

リオタールの哲学における「言説」について

『言説、形象』を中心に

大前元伸

リオタールの最初の主著である『言説、形象』¹は、彼の思想の展開の中で特殊な意味を持っている。リオタールがこの著作を発表したのは、最初の著作『現象学』を1954年に発表してから、およそ20年の沈黙の期間を経てからである²。その間社会主義運動に身を投じていたが、その後出版された『言説、形象』は、マルクスよりもフロイトの、政治や社会問題よりも美学の色合いが濃い作品であった。こうした特殊性のために、『言説、形象』を彼の思想の中でどのように位置づけるか、というのは大きな問題となるだろう。とりわけ、『言説、形象』における精神分析の解釈は、議論を強く特徴付けている。無論、同時代のフランスの思想家の多くが、何らかの形で精神分析を参照していたことを考慮すれば³、その事実のみで、リオタールの思想の特殊性を説明することはできないが、フロイト解釈をたどることで、少なくともリオタールの議論を整理することはできると考えられる。

上記のような背景を踏まえ、本稿ではリオタールの思想全体において、『言説、形象』が提起した問題系がどのように理解できるかについて、ひとつの解釈を提示することを試みる。まず、『言説、形象』の問題系を、言語をめぐる問いとして定義する。具体的には、言語活動は言語化出来ないものを前提としており、それを考える手立てとしてフロイトが援用されることを示す。続いて、『言説、形象』における言説の批判を、リオタールのフロイト理解に注目しつつ明らかにする。そして最後に、『言説、形象』の企図自体の位置づけを試みる。特に、リオタールが言説を批判しつつ言説を使わざるを得ない哲学を続けていることに注目し、同時期ないし後年の議論も視野に入れつつ、リオタール哲学全体に通底する一貫したテーマを提示することを目標とする。

1. 言語の「外部」を求めて

1-1. 言説の再検討——意義・意味・指向

リオタールの博士論文である『言説、形象』は、題名が示すように、言説 (discours) と形象 (figure) をめぐる議論である。だが『言説、形象』の中では、この二つの語について、どちらの語も明示的な定義は与えられていない⁴。それでも、言説の定義として、「パロールが生み出すもので、エクリチュールのなかで舞い、あるいは定着し、テキストになりうるものであるが、叫び声と異なり、体系としての言語を前提とするものでもある⁵」という指摘は納得できるものであるし、また、形象の説明として「言語の空間が、揺さぶられることなしに組み込むことが出来ない空間的な現れ、つまり言語の空間が意義のうちに内在化することができない外在性⁶」という一般的な定義を与えることはできる。このように、言説が言語の内在性で、形象が言語の外在性であり、言語の内部と外部の対立から言説を問い直している、という仮説を立てることができる。

では、リオタールはどのようにして言語の外部である形象を論じていくのだろうか。リオタールが言語活動について参照する三つの用語——意義、意味、指示——を整理することから始めたい。まず、リオタールはヘーゲルを例に取りつつ、意義 (signification) と意味 (sens) を区別する。そこでリオタールは、神と三位一体の関係を意義と呼び、三角形という名詞とそれが表す図形の間を意味と呼ぶ⁷。つまり、意義とは、ある単語と、いわゆるその辞書的な定義との間にある関係であり、ある言語体系に書き込まれた内在的な規則のことである。これに対し意味とは、ある単語が言語外のものと取り結ぶ関係のことである。三角形の例で言えば、「三角形」という名詞が、実際に描かれた三角形を意味するとき、それは言語体系の規則によってそう呼ばれるのではなく、三角形という名詞が「三辺から成る図形」という定義、すなわち意義を持っているからである。このように、単純な言語活動においてすら、すでに言語体系以上のことが含まれている。

意味に含まれるのは、sensというフランス語が示すように⁸、感覚的なものである。では、この感覚的なものは、言語にとってどのようなものとして位置づけられるのか。この点の解釈について、リオタールによるヘーゲル批判を検討してみたい。ヘーゲルは『精神現象学』の中で、「思考される感覚的なこのものは、意識に、つまりそれ自体一般的なものに帰属する言語にとっては、到達できないものである⁹」と述べ、言語と感覚は次元が異なることを認めつつも、「外

在性が内在的であるのと同様に内在性が外在性であるような場、それは言語である¹⁰」とし、リオタールが慎重に区別した意義と意味を、同じ「言語」の中で考えている。したがってリオタールはこれを、意義と意味の混同であるとして批判する¹¹。ただしこの批判は、意義と意味の分離によって、言語と感覚を切り離すべきだという意味ではなく、言語にとって感覚的なものは不可欠であるというのがリオタールの主張である。こうしてリオタールは、言語と感覚を繋ぐ原理である「指示」(désignation)ないし「指向」(référence)¹²という概念を導入するのである。

指向とは、「事実そうであるように、全体としてとらえられる言語記号が、自らが指し示すもの、現実の、あるいは非現実の事物、つまり発話者が語るものへと関連付けられる¹³」こと、と説明されている。つまり、言説が語る対象が問題となっている。ここでリオタールは、ソシユール言語学におけるシニフィアン—シニフィエの組み合わせによる意味作用とは別に、記号によって指向されるものという関係を考える。これは、「語る対象がどのようなものであれ、また言表がその対象にどのように関連付けられるのであれ、あらゆるパロールは何かについて語る¹⁴」と述べられるように、言語は語る対象という非言語的なものを前提としているからである。バンヴェニストを参照しつつリオタールが説明するように、それ自体では特定の概念を持たないが¹⁵、具体的な対象として何かを指すことで意味を持つ言葉(指示詞など)もある¹⁶。だが一方で、言語が意義の体系である以上、指向を加えても、意味を完全に表現できることにはならない。つまり、言語体系に則る記号と、それが語る対象とを結ぶ指向には、奇妙な関係がある。言語は、指向対象を見せてはくれるが、その対象から意味を汲みつくすわけではないのだ¹⁷。

1-2. 言説と精神分析

このような連結を認めるとして、それ自体は独立した意義の体系である言語は、外的な対象=意味をどう扱っているのか。リオタールは、フロイトに依拠しつつこの問題を捉え返そうとする。

ここで、リオタールが言語の問題を考えるためにフロイトの議論を参照する理由を簡単に検討したい。フロイトの位置づけを端的に示している次の引用を見てみよう。

フロイトによる考察が、彼の経歴の始めから終わりまで、つまり『夢解釈』から『モーゼと一神教』に至るまで、言語活動と沈黙、意義と意味、分節化と像、解釈しあるいは構築する説明と形象化する欲望の関係が中心になっていることに驚くのに、テキストを拷問し鎖でつなぐ必要はない。¹⁸

まずリオタールはフロイトの主題を言語の問題だとみなしている。ついでその問題系が、通常の意味での言語が問題にする領域ではない「沈黙」「意味」「像」「形象化する欲望」といったものを問うものだと考えている。特に二つ目の点は、指向の議論で見たように、言語にとって本質的であるというのがリオタールの立場である。リオタールが『言説、形象』において精神分析を援用するのは、そうした直接的には言語的でないものの、言語と何らかの関係を取り結びつつ、言語に影響を与えるものを考えるためである。

こうした背景を踏まえた上で、リオタールによるフロイト解釈を見てみよう。リオタールはフロイトの「否定」(Verneinung)を取り上げる。リオタールはこの題名を、(dé)négationと「否定」と「否認」の二重の意味を持つように訳し¹⁹、言語の作用を説明しようとする。まず「否定」の冒頭の文を見てみよう。

私たちの患者が精神分析の作業中に思い付いたことを明かす際の語り口は、若干の興味深い考察をするきっかけを与えてくれる。[...]「あなたは夢に出てきたこの人は誰なのかとお尋ねですね。私の母ではありませんよ」。私たちはこれを次のように訂正する。「だからそれは母なのだ」。私たちは、解釈する際、この「～ではない」という否定は度外視して、思い付きの中身だけを取り出す。それはちょうど、次のように患者が言ったに等しい、「確かに私はこの人物が母ではないかと思い付いたが、この思い付きの通りだと考えたくない」と。²⁰

フロイトが取り上げるこの例のうちに、リオタールは三つの否定を見て取る。まずは「これは私の母ではない」という文法的な否定で、つまり意義の次元での否定である。次に、この発言が対象とするのは母からは区別された別のものだ、という指向対象に関わる否定である。そして、「思い付きの通りだと考えたくない」という分析内容に見られる、無意識の否定である²¹。

以上の三つの否定の中で、言表の意味内容に影響を与えつつも、言説の上では全く表面化しないのが、三つ目の否定である。フロイトは、対象は母であってほしいという思考内容は抑圧されたものであり、「それは母ではない」という言明は抑圧の一種の解除だと述べる²²。リオタールはこの解釈を、「母を夢見たのではないと否定しながら、患者は母を『失われた対象』として、語るものを言説として構成あるいは再構成し、夢と欲望の地平から抜け出て、認識の地平に身を寄せる²³」として、言説と認識の問題として定式化する。つまり、叶わない欲望の対象である母を、言説の上で不在の対象として現前化している²⁴。ここからリオタールは、「それは母ではない」という発言のうちに、失われた母を求める無意識的な「欲動」と、その成就されない欲動を統御する「欲望」とを見て取る。かくしてリオタールは、意識の制御下にある言説に、無意識の欲動が介入する様を説明しようとする。

[フロイトのテキストである]「否定」のうちに必然的に前提されるのは、欲動が言語活動へと移行することで欲望へと変化することである。また、分析家にとって根本的な事実なのは、否定の判断、文法学者の否、患者の否認は、判断を構成する否定の反復のようなものだという事だ。おそらくは欲動的な韻律化の反復なのだが、しかしそれは超越的な否定性のなかで、つまり言語的な働きのなかで向きを変えられているのである。²⁵

欲望はしたがって二つの働きを持っている。一つは欲動の表象として、欲動が求めることを実現しようとする働きである。これとは対照的な働きとして、欲動の求めることを隠し、言語の形で別様に再構成する働きである。つまり、無意識の欲動を、意識化し受容可能な形に変換することである²⁶。リオタールが否定のうちに見るのは、欲動の無秩序な性質を引き継ぎつつ、言語の体系にも収まろうとする、欲望の両義的な働きである。

リオタールにおける言語の外部とは、言説が示す欲望によって示唆される欲動である。欲動こそが、言語活動において作動する欲望の源泉にして、言語活動から排除されている²⁷という意味で真に外部であるからだ。かくしてリオタールは、言説の外部として定義した形象の性質を、欲動に重ねあわせて議論を進めるのである。

したがって、言説と形象という二つの語に賭けられている問題は、外部と内部という単純な二項対立とは言えない。形象が持つ欲動の性質は、言説のうちで欲望として表現されるが、こ

これは欲望が欲動のシニフィアンであるという意味ではない。欲望は『最初』から変装であり、一度も言葉を発したことがない²⁸からだ。ここから、リオタールの議論は、欲望の両義的な性質が何を意味するのかへと力点が移っていく。

2. 言語の外部による侵犯

2-1. 言説における違反

形象は言説の「外部」であるというのは、前章で確認したように、形象が言説の対立項であるという意味ではない。実際この考え方は、形象を言説の「内部」へと還元してしまうものだ。というのも、形象と言説が二項対立であるとすれば、両者は同じ水準で思考されるものになってしまうからだ。また、形象と訳される *figure* という語は、図像や形姿といった意味に加え、文彩といった言語的な意味も併せ持つ多義的な語である。逆に、一義的に意味を伝えることを重視する記号などは、むしろ言語的であるとも言える。リオタールが目論むのは、こうした言語と非言語の錯綜を論じることにはほかならない。だからこそ、リオタールは、形象の両義的な性質を強調する。

形象は外部であり、内部である。[...]言語活動は均質な場ではない。感覚的なものを、向かい合うもの (*vis-à-vis*)、対象へと外部化するので、言語活動は分割するものである。また、分節化されたもののうちに形象的なものを内部化するので、言語活動は分割されるものでもある。²⁹

しかし、上記のような問題設定は、より根源的な困難さを内包している。なぜなら、『言説、形象』が何らかの形で形象について語ろうとすれば、それは言語外の領域に、つまり言語では表現されない領域に言語を向けることにほかならないからだ³⁰。さらに、言語の外部とは、そもそも言語を獲得して初めて認識される領域である。言語以前に、言語-非言語という対立は存在しない。つまり、言語の「外部」という問題の立て方自体、言語によって事後的にのみ把握されるものである³¹。したがって、『言説、形象』の要点の一つは、言語の内部からどのように失われた原初的な言語の外部へと辿り着くことが可能なのか、という点にある。

リオタールは、言語が「揺さぶられる」瞬間を手がかりに、形象を論じようとする。リオタ

ールは、言説における文法的・統辞的違反を取り上げて、それを「症状³²」ないし「言語的出来事³³」と呼ぶ。彼は例として、「私は君を音楽する(je te musique)」という文章を取り上げる³⁴。これは音楽(musique)という名詞を動詞として用い、しかも無理やり解釈しようにも意味が通らない文章である。こうした語の使用は、文の形をしているとはいえ、言語体系が持つ規則に「違反」したものとして、誤りを指摘されたり訂正されたりする。

この「音楽する」を違反だと断じるのは、あくまで言語によってである、という点である。この意味で、統辞法の間違ひは、言語に生じる治療すべき「症状」になる。だが、リオタールが別様に名付けるように「言語的出来事」と言えば、統辞に反する文を、言語という手段を用いつつも、その言語の体系から逸脱する形象=文彩、つまり非言語的なものの出来だと捉えることになり、単なる間違ひ以上の意味を持つ。そうした形象は、「解釈に挑戦するもので、文字ではなく、エネルギー論の用語によってしか捉えられない³⁵」ものである。ここでエネルギー論と言われるのはフロイトの用語で、心的現象は心的エネルギーなるものの大小によって左右されるという学説で、エネルギーが大きいほど緊張や不安の度合いが大きくなり、それを小さくすることで快や安定が得られるとされる³⁶。「私は君を音楽する」は、言語体系の安定性を脅かすものであるため、大きなエネルギーを持っていることになる。逆にこれを違反と判断することは、言語の規則に則らないものを排除することで、エネルギーを小さくする振る舞いである。つまり、「私は君を音楽する」をめぐる、言語の中には、言説と形象との間で、エネルギー的な葛藤があるのだ。

こうした「違反」は、エネルギー的葛藤として言説のうちに形象を垣間見せる。だが同時に、形象は「垣間見える」だけで、形象そのものが捉えられるわけではない。形象とは、「言語の空間が意義のうちに内在化することができない外在性」であるし、「私は君を音楽する」の例も、それ自体はやはり言説であるのだから、形象は先に述べたとおり痕跡としてしか現れない。したがって、「私は君を音楽する」は、認識できない形象がもたらした効果であり、その効果を通して初めて形象を想定することが可能になる。この意味で、言説にもたらされる違反は、形象の表現として、つまり形象的なものとして考えられる³⁷。かくして、リオタールは言説に対する形象の「作業」へと議論を展開する。

2-2. 形象と夢作業

リオタールが形象の「作業」という時、念頭に置かれているのはフロイトの『夢解釈』における夢の問題である。フロイトは、夢が欲望の成就であるという考え方から、一見不可解な夢を、欲望の表現として解説しようとする。リオタールはこの考え方を、形象の概念に援用する。だがリオタールの目的は、フロイトのように神経症を治療することではない以上、無意識の欲望に対してフロイトと異なる態度をとることになる。この異同について確認することで、リオタールが言語の「外部」を捉えようとする方法が明確になるだろう。

リオタールは、夢における欲望について、まず次のように述べる。

欲望の作品は、テキストにある力を適用することから生じる。欲望は語らず、パロールの秩序をねじ曲げる。このねじ曲げは本源的なものだ。というのも、欲望が想像的に成就されることは、根源的とされる幻想の製造所で生じたものと絶えず生じるものを、夢のアトリエの中で反復する侵犯からなるからである。³⁸

欲望の成就是、夢の中で「侵犯」を繰り返すとされる。これが「想像的」なのは、実際に成就されるのは「ねじ曲げられた」欲動だからである。つまり、夢において成就される欲望は、欲動が本来欲していたこととは別様に表現される。言い換えれば、夢の光景(夢内容)は、その光景を作り出した欲望の力の作用(夢作業)の結果である。こうした考え方から、その光景の元になる欲動(夢思考)を仮定することができる。

この夢をめぐる議論には、ある種のねじれが見て取れる。時間的に考えれば、夢思考は、夢内容のオリジナルであり、夢内容に先立つものである。しかし、夢思考があると考えることができるのは、実際に見た夢内容が、夢作業によって変形させられたと考えるからである。夢思考はこの意味で、「根源的とされる幻想の製造所」である。つまり、夢思考を根源的だと想定することはできるが、それは幻想でしかない。

この関係は、先に見た言説、形象的なもの、形象の關係に重ねられている。言語体系を前提としてある意義を持つ言説に、何らかの規則違反として形象的なものが見て取れる。これによって、大きなエネルギーをそなえた形象という別の領域を想定することができる。

しかしこうした装置を用意してもなお、無意識の欲動、形象には、やはり間接的にしか触れ

ることが出来ない。フロイトの夢をめぐる議論によって説明できるのは、リオタールの理解に則るならば、夢思考を夢内容に変形する仕方だけであり、夢思考そのものではないからだ。この認識は、フロイトとリオタールが袂を分かち重要な点である。フロイトはあくまで医者であったがゆえに、夢を解説する必要があった。一方、リオタールは形象を言語のように読むことが目的なのではなく、言語が届かない外部を提示することにある。したがって、それを知解可能な形で理解することは考えられていない。つまり、フロイトが夢における欲望をわかる形で取り出そうとするのに対し、リオタールは言説における欲望をわからないものとして取り上げようとするのである。

では、欲望の性質を特徴付ける形象の知解不可能性は、リオタールの議論においてどのように位置づけられるのだろうか。再び形象の「作業」という考え方に立ち返ろう。知解可能な言説の視点からは、形象自体を描くことは出来ない。言説にできるのは、形象の作業の痕跡を通して、形象にかろうじて触れることだけである。すると、形象の作業の結果である形象的なものにもまた、両義的な性質があることになる。つまり、言説にとっての違反として表れるという、侵襲的で破壊的な性質と、違反でありつつも言説の形を取るといふ、調整的・規範的な性質である。形象的なものは、この正反対の性質の間に生じるいわば葛藤の表現である。しかし、形象的なものが違反として言説に取り込まれてしまえば、形象的なものは「中和」されることになる³⁹。したがって、形象的なものが葛藤の場として機能するのは、それが言説のうちで言語的出来事として生じたまさにその瞬間、言語による即座の認識を妨げる瞬間であり、その時だけ、言説は言語の外部である形象を垣間見ることができるのだ。

2-3. 死の欲動——言説の解体

形象が持つ破壊と調整の葛藤が、言説の上では原則として違反として処理され無視されるというだけでは、言説と形象は原則として全く関係がない二つの領域であって、言説の自己充足性を批判するには十分ではない。そこでリオタールは、フロイトが「快原理の彼岸」で提出した死の欲動を読み替えることで、形象と言説の関係を説明しようとする。

まずリオタールの死の欲動解釈で特徴的なのは、その対立項の設定の仕方である。フロイトにおいては、死の欲動は生の欲動に対置される。だがリオタールは、生の欲動の代わりにエロス・ロゴス (Éros-Logos) という用語を提示する。しかもこの二つは「絡み合っている⁴⁰」とさ

れる。なぜエロス(生の欲動)はロゴス(言語、論理)であり、またそれは死の欲動と絡み合っているのか。これまでの議論で見てきたように、リオタールにとって言語とは体系であり、調整の原理である。この調整の説明として、リオタールはエネルギー論の観点から、言語を「経済(=節約)⁴¹」と表現する。これは、言語がエネルギー過多により緊張した不安定な状態をよしとせず、形象的なものを排除することでエネルギーを減少させ、言説の意味を理解する時間を最小限に抑えようとするを指している。エロス-ロゴスとは、フロイトにおける生の欲動が持つ刺激の減少と安定性への傾向を、言説の本質的な性質として解釈したものだと言える。

エロス-ロゴスに対置される死の欲動は、形象のように侵犯的な性質を持ったものとして描かれることになる。しかし、リオタールにおいて、死の欲動はフロイトのそれとは意味合いが異なる。フロイトの定義を参照してみよう。

有機体のあらゆる欲動は守旧的であり、歴史的に獲得されたものであって、退行を、つまり、以前のものの再興を目指すのだとすれば、有機体が進化してきた結果とは、妨害し逸脱させる外的影響のおかげだとしなければならない。[...] 有機体の守旧的な欲動は、生の進化経歴に押しつけられたこれらの変更をことごとく受け入れ、反復すべく保存しておくながら、しかしまさにその結果として、それ自身が変化と進歩を追求する力であるかのような、人を欺く印象を与えずには済まなくなる。その実、欲動は以前からの目標を新旧のやり方で達成しようとしているだけなのである。⁴²

フロイトにおいては、死の欲動もまた安定性への傾向である。死の欲動の特徴は「守旧的」であること、すなわち変化を拒むことにある。さらに、外部からの「変更をことごとく受け入れ、反復すべく保存」するとあるように、外的な圧力をも受容することで、安定を妨げる変化を体系の中に組み込むのだとされる。こうした性質は、生の欲動と軌を一にする機能にも見える。

ここでリオタールは、死の欲動の特徴として挙げられた「反復すべく保存」という性質を読み替える。反復という語も、再認可能性を重視するエロス-ロゴスに近いように思われる。しかし、リオタールはこの反復の性質を、エロス-ロゴスと死の欲動の「絡み合い」における鍵概念として捉え直そうとする。この考え方を支えるのが、先に述べたエネルギー論であるが、

その解釈においてリオタールはフロイトと考えを異にする。フロイトにおいて、エネルギーが小さければ快が得られる一方で、エネルギーがゼロになる状態は死であるとされる。そのため、心的装置はエネルギー量がゼロに至らない程度に少なくなるよう調整しようとする。これをフロイトは恒常性原理と呼ぶ。他方で、そうした限界を無視し、エネルギーがない状態、すなわち死へ向かおうとする原理を涅槃原理と呼ぶ。リオタールは、フロイト同様、エロスーロゴスをと死の欲動を、恒常性原理と涅槃原理に重ね合わせ、二つの欲動を同じ線上にあるものとして捉えようとする⁴³。しかし、フロイトがこの対立をエネルギー量の減少という観点から考えたのに対し、リオタールはエネルギー量の調整という観点に立つ。すると、死の欲動はエネルギーではなく恒常性自体を失わせる原理であるとされ、調整への傾向を持つ形式を無化する運動だと考えられる。フロイトが死の欲動を、究極の安定であるエネルギーのない状態に向かうものと規定したのに対し、リオタールは死の欲動を、エネルギーの自由な運動を目指す脱調整の動きとして提示しているのである。

調整の原理を狂わせることによるこの形式の無化こそが死の欲動だとすれば、それはいかなる意味で「回復すべく保存」されているのだろうか。リオタールは、死の欲動もまた一つのエロスであると主張する。『言説、形象』とほぼ同時期に、リオタールは次のように述べている。

死の欲動は、エロスとしての回復にはかなりません。しかし、死の欲動とはある諸効果に関係するもので、その諸効果は、エロスの観点からは、[...]死としてのみ、つまり解体としてのみ把握しうるものなのです。[...]死の欲動は、別の欲動、別のエネルギーではありません。脱調整され、脱調整するものとして、それは同じエネルギーなのです。⁴⁴

既存の形式を脅かす死の欲動は、自由なエネルギーの運動という別の流れを目指すという意味でエロスであるが、エネルギーの調整をもたらすエロスにとっては解体者として現れる。この意味で、エロスーロゴスと死の欲動は、同じエネルギーの調整をめぐる衝突として把握できる。言説といったエロスーロゴスは、既存の調整を守るべく、この別のエロスを「侵犯の形式」である死の欲動として排除しようとする。しかし、同じエネルギーを対象とする以上、潜在的な死の欲動、つまり「形式の侵犯」は原理的に常に存在し、既存のエロスと衝突する⁴⁵。つまり、エロスーロゴスは、安定を目指す調整の原理であり、死の欲動は、既存のエロスーロゴスに必

然的に到来しその地位を脅かす別の原理である。かくして、形式が安定を求め続ける限りにおいて生じる体系への侵犯は、規則の違反として「保存」されるが、このプロセス自体は「反復」されることになる。死の欲動をこうした観点から捉え直すことで、リオタールは言説という体系が、形象という名の死の欲動によって、絶えず安定性を脅かされ、解体されうることと主張するのである。

3. 哲学という言説の試み

3-1. 言説の「正しさ」

前章で確認したように、言説とはそれ自体のうちに組み込まれた死の欲動である形象によって、その体系の安定性を剥奪される。だが、この議論はリオタール自身にも跳ね返ってくる。リオタールは哲学者であり、哲学は何よりも言説によって行われるものだからである。自らの哲学すら危険に晒すことで、リオタールは何を試みたのだろうか。ここでは、『言説、形象』の問題系をより深化させたといえる『リビドー経済』や、彼の主著である『文の抗争』を参照しつつ、リオタールが批判しつつも手段とした言説とはどのようなものなのかを検討したい。

『リビドー経済』の最後の章で、リオタールは自らのこれまでの議論を総括するかのようになり、次のように述べる。

この言説は何なのか。この言説はいかに正当化されるのか。どこに置かれるのか。その機能は何なのか。誰がそんなことについて語ることを許したのか。[...]あなたのやっていることは、純然たる想像の産物であり純然たる修辞ではないのか。真なるものを探し、それを言い、言ったと言い張るのか。新しい哲学とは別のものを、さらなる体系を作ったのか。さらに言葉を重ねるのか。少なくとも、そうした言葉は世界を変えると主張するのか。そうでなければ、何を主張するのか。こうしたことを確認するなら、なんとみじめなのだろう。⁴⁶

リオタールは、これまで見てきたような言説の問題を認識していなかったわけではなく、むしろ、言説に安住することをかなり強く批判している。とりわけ、ここで「正当化」(légitimer)や「許す」(autoriser)といった言葉が表すように、言説それ自体を支える前提となるものへの

問いが提起されていることは注目に値する。言説が形象を違反として言説のうちに回収するような言説と形象の関係は、言説が正しいものであることが前提とされる。そして言説が正当であるということは、その言説が真理を表しているということをも意味する。しかし、言説はどうしても語る対象のすべてを捉えられないことを示した以上、言説が真理の表現であると無批判に言うことはできない。

ここでリオタールが「真理」や「正しさ」の問題にこだわるのはなぜだろうか。それは、リオタール自身が言説を用い、言説にまつわる危険を冒しているからに他ならない。すなわち、あらゆる言説は真理の表現ではない、というリオタールの言説そのものは真か否か、という問題である。実際、『リビドー経済』は強い調子で様々な学説を批判しつつも、一貫してリビドーを擁護している。どれほどリオタールが体系を自称するものを批判するとしても、その批判自体が何らかの真理に依拠するよう見えるならば、自身の主張の正当性を批判的に検討できていたのか、という反論は免れ得ない⁴⁷。加えて、『言説、形象』や『リビドー経済』で試みられた戦略は後年放棄される。死の欲動やリビドーの優位を説くことで、自己充足的で外部との矛盾を考慮しない体系という過ちを指摘することができたとしても、体系の解体だけを問題とするならば、結局それは体系間での弱肉強食の争いになり、強者の正義が体现されるだけになる可能性もある。自足的な体系を排したからといって、正しいことがなされることにはならないのだ⁴⁸。かくして、言説の正当性を問いに付すという戦略は、自身の言説の不安定さも顕にすることにつながっている。

哲学的な言説をめぐるこうした危機を前にして、われわれはしかし70年代のリオタールを別の観点から評価することを試みたい。まず上記の批判に関して、リオタールの言説が何らかの真理に基づいた批判であるというのは、依然として言説が何らかの真理を表しているという臆見に囚われている、と答えることができる。言説が自己充足的な体系ではないという考えを受け入れるならば、言説が真理を語るものであるという考えを放棄しなければならない。こうした考え方は、『リビドー経済』の中ではっきりと述べられている。

それはしたがって、古典時代のように〈論考〉ではないだろうし、モンテーニュやヒュームがやったように〈試論〉や〈探求〉でもないだろう。この「言説」は定められた対象について取り扱うのではないし、そうした対象や、その主題に適う言表を探しているのです

らないだろう。⁴⁹

リオタールがめざす言説とは、真理についての言説ではない。というのも、まず真理があるとしても、真理について語ることは、それを不在として現前化することで可能になるのだから、真理自体は言説の背後に隠されてしまう⁵⁰。したがって、リオタールが駆使する言説は、真理を明るみに出すことではない。さらに、哲学的言説が特定の対象についての言説ではないという主張は、より根源的な問題、つまり言説は真理を捉えそこねる運命にある、という問題に繋がる⁵¹。この意味で、リオタールの言説は語らないものである。

3-2. 哲学の場としての言説

こうした言説と真理の関係を新たに規定するものとして、『言説、形象』の用語法をここで再度取り上げるべきだろう。この著作の冒頭でリオタールは、世界が「読まれる」ものではなく、「見られる」ものであると主張する⁵²。これまでの議論を踏まえれば、「読むこと」とは、言説を通じた体系への回収であり、「見ること」とは、第一義的に正しい再認を妨げるものをそれ自体として把握することである。したがって、「見ること」によって、人間は認識を攪乱するものと向き合うことになる⁵³。ところでこの攪乱するものは、体系に対する違反として考えるなら、そのものとして把握する可能性が失われてしまう。他方で、攪乱そのものとして取り込んでしまえば、理解の準拠となる体系が損なわれる。そのため、この攪乱するものそれ自体は、言説という欲望のもとでは理解することができない。

このように考えるならば、「見ること」とは、「読むこと」とは別様に、体系を攪乱する形象に向き合う方法である。だがそれは、言説という体系を主な手段とする哲学に対し、とてつもない不安を引き起こすだろう。リオタールは、この不安を、芸術の中に見てとっている。

内的経験の深さは、誰にとっても同じである。しかしまれなのは、欲望が持つ深い形象を凝視し、その形象のために戯れの空間をあてがい、内的経験がその形象を反響させる空虚を開いたままにしておく不安を受け入れることである。芸術家は、和解するものではなく、統一が不在であることに耐えるものである。⁵⁴

欲望の二つの性質のうち、調整は統一をもたらすが、破壊は解体をもたらし、統一を損なうことで不安をもたらす。つまり、ここで不安の原因とされているものは、統一の不在である。これを言説に当てはめるならば、自己充足的であろうと望む言説が、その実閉じた体系でないことによって不安が生じる、となる。しかも、安定を求めると死の欲動が作動する以上、原理的に言説は絶え間ない不安にさらされていることになる。したがって、言説を「読む」ことは、不安を減じようとして新たな不安を呼びこむというプロセスになる。

反対に、言説を「見る」とは、不安を解消しようとするのではなく、不安を受け入れ、耐えることである。ここで「見る」対象とされるのは、「読むこと」が違反として回収しようとするものである。つまり、言説は「読まれる」べきものではなく、「見られる」べきものであるというのは、それ自身透明な言説を通して、直ちに再認可能な真理を見て取るのではなく、不透明な言説とともに、その彼方にあるぼやけた「何か」を垣間見るものであると言えよう。その「何か」につけられた名前こそが形象である。

このように考えるならば、最初に提示した言語の内部と外部という作業仮説も、もはや有効とはいえない。第一に、言説は閉じておらず、常に言説の外部を取り込まなければならないが、それも不完全にしか遂行できない。第二に、その外部は言説にとっては異質であり、言説を解体するものとして現れるので、違反という形でしか言説の体系に取り込み得ない。第三に、そうした欲望の想像的な成就を続けても、言説は決して一つの統一体にならないし、また人間が言語を媒介に世界を認識する以上、言説の外に立つこともまた出来ない。だとすれば、リオターールの最終的な狙いはむしろ、言語の内側と外側という対立を立てることで、この対立が成立しないものであることを示すことにあると言える。つまり、リオターールが言説とその外部という言葉によって示そうとしたことは、言説がその「外部」との緊張関係においてしかありえないと主張することで、体系は常に変化することを肯定することにあつたのだ。リオターールが示そうとするのは、言語の内部と外部という対立の「脱構築」である⁵⁵。

このように、70年代前半におけるフロイトの強い影響を受けたリオターールの思想を、言説における葛藤の問題化として読み解くことで、リオターールが言説をめぐる実践の問題を早い時期から考えていたと示すことが出来る。さらにこの見方は、実のところ70年代のリオターールに限定された問題ではない。とりわけ、彼の80年代の代表的な著作『文の抗争』においては、これは中心的な問題ですらある。『文の抗争』でリオターールは、言説を文の連鎖として捉え、連鎖さ

れる文と、連鎖されず忘れられる文との間の衝突を「抗争」(différend)として定義する。この議論において鍵となるのは、「言説のジャンル」(genre de discours)という考え方である。これは、ある言説が展開される目的を意味する。このジャンルは、発話者とその受け手によってしか正当化されない。リオタールがしばしば取り上げる例である「扉は閉まっている⁵⁶」を参照しよう。この文章からつながりうる応答として、『『当然だ。扉は一体何のためにあると思っているのか』、あるいは『わかっている、私を閉じ込めようとしているのだ』、あるいは『よかった、君に話がある』⁵⁷』などが考えられる。発話者への不満、自らの置かれている状況の確認、状況を確認した上で話題転換という三つのジャンルのうち、どれが「扉は閉まっている」に続く文章として一番正しいかを決定することはできない。ただ、何らかの意図を持って「扉は閉まっている」という文を発言したものと、その文を引き受け応答する者によって、ジャンルが作られる。ここに、選択されたジャンルと選択されなかったジャンルの間に抗争が生じる。抗争とは、あるジャンルの選択によって、別のものが排除⁵⁸される時に生じるのだ。

この問題系は、『言説、形象』や『リビドー経済』等と重要な観点を共有している。それは、言説こそが哲学の場であるという意識である。欲望や欲動の理論を中心にした思索においては、安定を揺さぶられる場として言説が考えられ、言説に対してどのような圧力が働くか、という立論がなされていた。『文の抗争』においては、言説を繋げるジャンルが権利上複数存在し、必然的に排除されたジャンルがあると指摘することで、言説に対する判断を促す、という側面が強調される。リオタール自身が述べるように、正義や判断の問題は70年代初頭にはなかったものであるが⁵⁹、リオタールが哲学的な問題を提起する場合は、一貫して言説である。正確に言えば、リオタールはそうした言説において、常に何らかの問題が生じていること、常に思考されなければならないものが存在していると主張している。その思考されるべきものは、言説にとって異質で不安なものである。そうしたいわば言説の他者⁶⁰と向き合い、それでも忍耐強く言葉を紡ぎ続けること。それが、リオタールが「言説」に賭けてきたものである。リオタールの哲学とは、言葉の彼方にあるものへと言葉を向けるという背理を冒すことで、言葉の彼方の存在を出来事として提起する哲学なのである。

おわりに

本稿では、次のことを確認できた。(1) リオタールは『言説、形象』において、言語の外部

を想定しつつ、それがいかに言語活動にとって不可欠なものなのかを示そうとした。また、リオタールはフロイトの問題系を、言語化出来るものと出来ないものとの関係であると考えてることで、『言説、形象』の問題系を欲望の観点から考えようとしていた。(2) リオタールは言語によって直接に認識できない言語の外部を垣間見る手立てとして、言説における統辞法の違反を、言語の外部が残す痕跡として検討した。この痕跡は、欲望の相反する性質——言説のうちに入り込み、仮初の成就を目論む調整的な性質と、本来の欲望を成就させようと言説の秩序を無視する破壊的な性質——の葛藤の場として捉えられた。そして、死の欲動を導入することで、この二つの性質が反復され、言説という体系は自ずと解体されることを明らかにした。(3) 言説を解体したことで、リオタール自身の言葉が危険に晒されるように思われるが、リオタールはそもそも言説を、哲学的な問題が生起する場だと考えており、その意味で、70年代前半の欲望・欲動中心の思想と、80年代以降の文の哲学には連続性を見て取ることができた。

言説という観点から論じることで、われわれはリオタールの思想に通底する一貫した問題系を見出そうとしてきた。もちろん、『言説、形象』がアウシュヴィッツについて論じるのではないし、『文の抗争』が絵画を検討することはない。しかし、70年代に用意された問題系が、80年代の著作の理解を深める手がかりとなりうることを示すことは出来たように思われる。

なお、本稿では論じられなかったが、リオタールは80年代に入ってもしばしばフロイトを取り上げている⁶¹。もちろんそれは、『言説、形象』や『リビドー経済』における議論の復権ではなく、むしろそれまで取り上げて来なかったフロイトの概念を再検討するものである。したがって、フロイトの読解の変化から、リオタールの思想をたどることができるだろう。また、本稿ではわずかな言及にとどまったラカンの精神分析との関連も、とりわけ70年代の思想を読み解く上での課題である。他にも、『言説、形象』の別の大きな軸である現象学の問題など、解明されるべき問題は山積している。こうした諸問題を今後の研究課題として位置づけつつ、この論を終えることにする。

¹ この著作の書誌情報は次の通り。Jean-François Lyotard, *Discours, figure*, Paris, Klincksieck, 1971. (『言説、形象』合田正人監訳, 三浦直希訳, 法政大学出版局, 2011年。)以降原書はDFと略記する。なお本稿では、外国語の著作を引用する際、邦訳がある場合には十分に参照しつつ、最終的には筆者の責任で訳出した。脚注では原書のページ数と、それに続けて邦訳のページ数を括弧で示す。なお、邦訳の書誌情報は初出の際に示すに留める。

² この著作の書誌情報は次の通り。Jean-François Lyotard, *La phénoménologie*, Paris, PUF, coll. « Que sais-je? », 1954. (『現象学』高橋允昭訳, 白水社, 1965年。)

³ 特に、『言説、形象』から影響を受けているドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』等は、フランスの思想における精神分析の受容という観点からも検討されるべきだろう。

⁴ 『言説、形象』の索引を見ると、discours (言説)の項目があるが、リオタール自身索引付けできないと述べている。(DF, p.420.)

⁵ Mikel. Dufrenne, « Doutes sur le "libidiné" », in Jean-François Lyotard, Paris, Inculte, coll. « Collectif-Essai », 2009, p. 42-43.

⁶ Claire Pagès(dir.), *Lyotard à Nanterre*, Paris, Klincksieck, 2010, p. 373.

⁷ DF, p.45. (57-58頁)

⁸ フランス語で sens は、「意味」と「感覚」という意味がある。

⁹ Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1952, p.88. (『精神の現象学 上巻』金子武蔵訳, 『ヘーゲル全集 4』岩波書店, 1971年, 108頁)

¹⁰ *Ibid.*, p.505. (『精神の現象学 下巻』金子武蔵訳, 『ヘーゲル全集 5』岩波書店, 1971年, 1059頁)

¹¹ DF, p. 47. (60頁)

¹² この二つの語は、少なくとも『言説、形象』においてはほぼ同義語として用いられているが、『文と抗争』などでは、réfèrentが多用されることから、本稿では「指向」という用語で統一する。

¹³ DF, p. 78. (110頁)

¹⁴ *Ibid.*, p. 73. (102頁)

¹⁵ 「対象の不在よりも、概念の不在を強調するほうが正当であるように、私には思われる。[...]私の用法は、言説の現存による指示が、自我の客体化なしには成立しないことを証明している」*Ibid.*, n. 5, p. 119. (註(5), 175頁)

¹⁶ Cf. Emile Benveniste, « La nature des pronoms », in *Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard, coll. « tel », 2vols. 1966-1974, t. 1. p. 255. (『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳, 河村正夫他訳, みすず書房, 1983年, 237頁)

¹⁷ 「言葉は単に、話者の経験においては物への通路であり、それを見せる照準線である」(DF, p. 82. (116頁))

¹⁸ *Ibid.*, p. 59. (80頁)

¹⁹ 『精神分析用語辞典』には、Verneinungの訳語として(dé)négationが使われており、「Verneinungという言葉は、論理的・文法的な意味での否定[négation]を指すが、心理的な意味での否認[dénégation]をも指す」(Jean Laplanche, Jean-Bertrand Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris, PUF, coll. « Quadrige », 2007, p. 113. (『精神分析用語辞典』村上仁監訳, 新井清他訳, みすず書房, 1977年, 396頁。))と説明されている。

²⁰ Sigmund Freud, « Die Verneinung », in *G. W. XII*, p. 11. (「否定」石田雄一訳, 『フロイト全集 19』岩波書店, 2010年, 3頁)

- ²¹ 以上はそれぞれ、統辞的否定、構造的否性、志向的否定性と呼ばれている。Cf. *DF*, p.121(177-178 頁)
- ²² S. Freud, *op. cit.*, p. 12. (4 頁)
- ²³ *DF*, p. 122-123. (180 頁)
- ²⁴ 対象を不在と現前の交錯した関係に位置づけるこの議論について、リオタールはフロイトの「快原理の彼岸」を援用している。この中でフロイトは、子供が糸巻きを見えないところへ投げ、それを回収する遊びをする際、より不快であるはずの糸巻きが見えなくなる場面を繰り返していると指摘し、これを母親の喪失を受け入れる欲動断念の表れだと考えた (cf. Sigmund Freud, « Jenseits des Lustprinzips », in *G. W. XII*, Frankfurt am Main, S. Fischer Verlag, 1940, p.12-13. (「快原理の彼岸」須藤訓任訳, 『フロイト全集 17』岩波書店, 2006 年, 64-65 頁.))。リオタールはこの母親への欲動が不在の母の認識へと変化することを、欲動から欲望への言語を介した移行だと解釈している。
- ²⁵ *Ibid.*, p.127. (187 頁)
- ²⁶ この点については、精神分析家のグリーンが軌を一にする見解を示している (Cf. André Green, « Aspects du négatif », in *Le travail du négatif*, Paris, Minuit, 2011, p. 38-39.)。彼は後に『リビドー経済』への書評を書き、またリオタールも彼の著作 *L'œil en trop* への書評を書くなど、積極的な交流があったことから、この方向性の一致は単なる偶然ではないだろう。
- ²⁷ ここでの「排除」は、ラカンの用語法による。ラカンは、無意識に押し込められ想起されない抑圧と区別する形で、言語上に現れる可能性が失われた状態に追いやられたものを排除と呼ぶ。Cf. Jacques Lacan, *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 387. (『エクリ 2』宮本忠雄他共訳, 弘文堂, 1977 年, 93 頁)
- ²⁸ *DF*, p.246 (368 頁)
- ²⁹ *Ibid.*, p.13. (9 頁)
- ³⁰ この点については、次を参照。Cf. Alberto Gualandi, *Lyotard*, Paris, Perrin, coll. « Tempus philo », 2009, p.43.
- ³¹ この問題については、精神医学の面からアプローチした以下の研究が参考になる。Cf. 内海健『さまよえる自己：ポストモダンの精神病理』筑摩選書, 2012 年, 77-107 頁。
- ³² *DF*, p.145. (208 頁)
- ³³ *Ibid.*, p.146. (208 頁)
- ³⁴ *Ibid.*, p.145-146. (208 頁)
- ³⁵ *Ibid.*
- ³⁶ Cf. J. Laplanche, J-B. Pontalis, *op. cit.*, p. 125-128. (94-97 頁)
- ³⁷ リオタールが『言説、形象』で、形象を「見ること」や視覚芸術と関連付けて論じるのは、この「表現」という観点に依るところが大きい。また、形象を表現という観点から論じ、リオタールの形象による批判を検討するものとして、例えば以下のテキストを参照。Cf. Juan Luis Gastaldi, « Qu'est-ce qu'une figure? : Lyotard et le problème d'une théorie de l'expression », in *Lyotard à Nanterre*, *op. cit.*, pp. 203-221.
- ³⁸ *DF*, p.239. (357 頁)
- ³⁹ *Ibid.*, p.146. (208 頁)
- ⁴⁰ *Ibid.*, p. 19. (18 頁)
- ⁴¹ Cf. « Sur une figure de discours », in Jean-François Lyotard, *Des dispositifs pulsionnels*, Paris, Galilée, 1973, p. 118. 以降原書は DP と略記する。
- ⁴² S. Freud, *op. cit.*, p. 39-40. (91-92 頁)
- ⁴³ ただし、フロイトの中でも、快原理をどのような意味で理解するかは、時期や論考によって違いがある

- (cf. J. Laplanche, J-B. Pontalis, *op. cit.*, p.335. (40 頁))。
- ⁴⁴ « Notes sur le Retour et le Capital », in DP, p. 221. (「回帰と資本についてのノート」本間邦雄訳、『ニーチェは、今日?』筑摩書房, 2002年, 140頁。)
- ⁴⁵ この二つの表現については、次の箇所を参照。DF, p. 350. (533頁)
- ⁴⁶ Jean-François Lyotard, *Économie libidinale*, Paris, Minuit, 1974, p.287. (371頁) 以下原書はELと略記する。
- ⁴⁷ Cf. Claire Pagès, *Lyotard et l'aliénation*, Paris, PUF, 2012, p.101-102.
- ⁴⁸ Cf. Jean-François Lyotard, Jean-Louis Thébaud, *Au juste*, Paris, Christian Bourgois, 1979, p. 170-171.
- ⁴⁹ EL, p.303. (392頁)
- ⁵⁰ 註16を参照。
- ⁵¹ リオタールは、言葉が真理を捉えないという発想を、すでに60年代から持っていたことから、この考え方は正当化出来るだろう。リオタールは1964年の講演でこう述べている。「哲学のパロールが明示的に目指している真理は取り逃されます。そして哲学のパロールが、真理の言うことからそれるかぎりにおいて、パロールがそれたことを語る限りにおいて、このパロールは真なのです。」(Jean-François Lyotard, *Pourquoi philosopher?*, Paris, PUF, 2012, p. 86.)
- ⁵² DF, p. 9. (1-2頁)
- ⁵³ こうした攪乱は、視覚芸術における感動や情動といった美学的な問題とも接続する。例えば本間邦雄は、よい抽象絵画は見る者を「揺さぶってリオタールのいう『感動した身体』に導く」と述べ、抽象絵画と身体の関係を生きたリオタールの言説に重ねようとする。Cf. 本間邦雄『リオタール哲学の地平 リビドーの身体から情動一文へ』書肆心水, 2009年, 79頁。
- ⁵⁴ DF, p. 383. (585頁)
- ⁵⁵ リオタールは『言説、形象』の中で、しばしば「脱構築 *déconstruction*」という語を用いる。この語はデリダの用語法を連想させるし、実際『言説、形象』の中でもデリダの主張に触れつつ議論を進める箇所がある (cf. *Ibid.*, p.75. (104頁))。だがリオタールの脱構築は、言語体系のなかに、それを支える「厚み」を見て取り、言語体系の充足性を批判するものである。その意味で、「脱構築がどのようなやり方をとにしても、それが差異を現れさせるのは、いつも異質性を並列することによってである」という指摘は的を射ている (Cf. Corinne Enaudeau, « *Discours, Figure : coup et après coup* », in Patrice Maniglier(dir.), *Le moment philosophique des années 1960 en France*, Paris, PUF, 2011p. 533.)。
- ⁵⁶ Jean-François Lyotard, *Le différend*, Paris, Minuit, 1983, p.123.(『文の抗争』陸井四郎他訳, 法政大学出版局, 1989年, 169頁)
- ⁵⁷ *Ibid.*(169-170頁)
- ⁵⁸ ここでの「排除」は、註27で確認した、ラカンが用いる意味のそれである。
- ⁵⁹ この点については、註47及び47も参照。
- ⁶⁰ 『言説、形象』の中で、しばしば言語の外部を指し示す言葉として「他者」(*Autre*)が登場している。ここで言われる他者は、言説にとって共役不可能なものとして捉えられているという点は注目すべきである。Cf. DF, p. 10. (2-3頁)
- ⁶¹ 例えば、次のような著作があげられる。Jean-François Lyotard, *Heidegger et les « juifs »*, Paris, Galilée, 1988. (『ハイデガーと「ユダヤ人」』本間邦雄訳, 藤原書店, 1992年。) *Lectures d'enfance*, Paris, Galilée, 1992. (『インファンタス読解』小林康夫他訳, 未来社, 1995年。)

Sur le « discours » dans la philosophie lyotardienne autour de *Discours, figure*

Motonobu Omae

Le présent article veut traiter du « discours » comme question centrale chez Jean-François Lyotard, en examinant notamment son œuvre *Discours, figure*.

Notre discussion commencera par clarifier la problématique générale de *Discours, figure*. Suivant une hypothèse selon laquelle Lyotard vise à décrire l'« extériorité » de la langue, nous analyserons l'interprétation lyotardienne des théories de Freud qui, selon le philosophe, porte sur la relation entre le linguistique et le non-linguistique, permettant au philosophe d'introduire dans sa discussion la pulsion forclosée qu'est la figure et le désir qu'est son expression.

L'impossibilité de verbaliser la figure conduit Lyotard à analyser la fonction du désir. Il reconnaît dans le discours le désir à l'œuvre, qui a les deux aspects contradictoires : régulation discursive et destruction figurale. Grâce à l'interprétation originale de la pulsion de mort, cette contradiction est considérée comme conflit entre le réglage et le dérèglement de l'énergie, ce qui lui permet de déclarer que le discours tend à se détruire tout en se stabilisant.

Cet argument nous amène à nous poser la question radicale de savoir si la philosophie lyotardienne n'est plus vraie vu que sa critique du discours s'applique au sien. Toutefois, elle consiste à affirmer que le discours ne *représente* pas une vérité, mais il est un *lieu* où advient ce qui est à penser. En commentant d'autres ouvrages tels qu'*Économie libidinale* et *Le différend*, nous montrerons que Lyotard a pour objectif la déconstruction de l'opposition extériorité-intériorité du discours et que cette problématique persiste pendant tout son parcours philosophique. Ainsi la pensée de Lyotard se manifeste-t-elle comme une quête sans cesse de problèmes plutôt que de la solution.